



3年・ラウンド3(音読)

事例3 横浜市立中川西中学校 授業者: 榎本由理子先生

使用教材: 『COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE』3(光村図書) Unit 7

「いくらやっても使えるようにならない英語教育は終わりにしよう」前校長の強い呼びかけのもと、同校では2017年からラウンドシステムを開始した。「教育熱心な保護者も多いこの地域では、受験のことを抜きにして英語教育を考えることはできません。ラウンドシステムは、もともと中高一貫校で考え出された学習法ですが、高校受験も視野に入れた、本校ならではのシステムをつくっていくことにしました」榎本由理子先生は語る。

本校ならではのといっても、和訳をしない、文法を先に説明しない、という点は同じだ。はっきりとわからない中で、わかることから理解しようとする姿勢を育てることが大事だという。榎本先生の授業には、それがよく表れている。

英語と日本語を1対1で対応させない

本時は、Unit 7のラウンド3(音読)。教科書のNew Wordsは、ラウンド3で初めて取り上げる。榎本先生は身振り・手振り、表情も駆使しながら、単語の意味を英語で説明する。

例えば“insist”の場合はこうだ。黒板のイラストを指しながら、“At first, Taku didn't want to sing. (初めはタクは乗り気じゃなかった)”と状況を説明したあと、手を振りながら“Oh, no way! No way!”とタクの真似をしてみせた。“But his friends said, 'You can do it. You are a good singer.' (でも、彼の友達は「君ならできるよ、君は素晴らしいシンガーだよ」と励ました)” “At last(ついに)....”,

先生はここで少し間をあけてからタクの言葉を見た。“OK, if you insist.”生徒たちは、なんとなくわかったような、という表情をしている。そこで先生は、もうひと押しする。「学級委員を決めるときとか、リーダーを決めるときを想像してみてください」。すると一人の生徒が「わかった! 『どうしても』だ」と発言。ここでようやく先生は、“insist”は、強く要求する表現だということを伝えた。

「単語は、意味を一つだけ覚えても、状況が変わると使えなくなります。だから、どんな場面で使う言葉なのかを理解するように指導しています」(榎本先生)。同校のテストは、この教え方にきちんと対応している。英文の穴あき問題の場合、状況に合う単語を書ければOKなので、例えば“I had a () time.”の()は、“good”でも“great”でも正解だ。

活動は短く区切って集中させる

榎本先生の授業は、テンポのよさも大きな特徴の一つだ。一つ一つの活動を短く区切る。さ



できるだけ日本語は使わずに英文の内容を伝える榎本先生。



※1 「New Words」のワークシート

きほど全員で確認したNew Wordsを、今度はワークシート(※1)を使って音読する。本時の19個のNew Wordsに、音読しながらチェックマークを入れていく。タイマーを使って、時間を短めに区切るのがポイントだ。1分間で3周することが目標なので、かなり集中しなければならない。それが終わったら、先生は間髪を入れず「ペアA!」と呼びかける。生徒は隣りどうしでペアになり、お互いの音読をチェックする。終わると一瞬の間もなく、ペアB(前後)、そしてペアC(斜め)と続く。

この他、グループや個人での音読も行う。個人で行う場合は、四方読み(立ち上がり、正面1回、右向き1回、後ろ向き1回、左向き1回、正面1回と計5回読む)などを取り入れている。この方法は、生徒たちがスムーズに読めているかどうか、教師が目で確認できるよさもある。

教科書の内容を染み込ませる

もう一つ、同校ならではのシステムといえるものがある。毎時間の帯活動で、教科書内のタスク(「Try It!」などのリスニングやスピーキング活動のコーナー)を漏れなく使い、Unit本文で学んだことを確認、活用していく。「副教材はほとんど購入していません。あれこれ手を出し



テンポの速い授業に、生徒たちもすっかり慣れていく。

ぎるよりも、まずは教科書の内容をしっかり染み込ませようと考えています」。

榎本先生の方針は、だれよりも生徒たちに理解されている。本誌3~4ページの漫画に登場しているK君は、実は同校の生徒だ。K君のスピーチは、ラウンドシステムを実際に体験している生徒の思いがわかる貴重な内容だ。

学校の代表として素晴らしいスピーチを披露したK君について、榎本先生はこう語る。「彼は特別な生徒ではありません。本校の多くの生徒が、K君同様、英語で自分の考えを堂々と述べる事ができるんです。1年生のときから、“Why?” “Because....”の会話を繰り返していたら、3年生になった今では、英語の授業に限らずいろいろな場面で、このような会話ができるようになったとのこと。

「高校受験にも対応できるように」と考えて取り組んだラウンドシステムだったが、生徒たちは、すでに一つ上のステージに進んでいる。K君はスピーチの中で、「英語で話すことは楽しい」と笑顔で語っていた。何のために英語を学んでいるのか、同校の生徒たちは、その本当の意味をきっとわかっているに違いない。

